
大人の関係～それぞれの気持ち

鈴木祥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大人の関係／それぞれの気持ち

【Zコード】

Z3792Z

【作者名】

鈴木祥

【あらすじ】

同級生の2人は、アラフォーになって、関係を結ぶ。島田拓司、妻子持ち。山本奈々、シングルマザー。傍から見れば、ドロドロの関係だが、二人にとっては、中学時代の延長の悪戯仲間の延長のようなもの。

2人を中心に、地方都市を舞台にアラフォーになつた男と女の若くもなく、かといって完全に大人にはなりきれない彼らの微妙な心情を重くなりすぎないように淡々と書いてみたいと思います。

直接的な性表現はありません。

微妙な心理を描きたいと思いますので、潔癖な方には受け入れられない内容かもしれません。精神的に許容範囲の広い方のみ、閲覧をお願いします。

第1話「向で俺と寝たん?」（前書き）

初めて、投稿します。
初めてお願いします。

第1話「何で俺と寝たん?」

「それで、お前、何で俺と寝たん?」

島田は、ベッドに腹ばいになり、

枕に肘をついて上体をおこし、煙草に火をつけた。

「なんでだろう~ね。」

奈々は、島田の隣に、

情事の後の気だるい身体を横たえたまま、

顔だけ、島田のほうへ向けた。

中学の時から、

中々のイケメンで

スポーツも運動もできた島田は

それなりに、女子に人気があった。

中学時代、何故か席が隣になることが多い、
2人は話すことも多かつた。

だが、気は合つもの、恋愛感情はなかつた。

当時、島田は「ゆきのちゃん」という女の子が好きだった。
奈々の初恋は、遅く、大学に入学した後のことだ。

「なんでだろう~ね。。。島田くんは?」

奈々がポソリと呟つと

「なんでだろう~ね。」

島田は、奈々の声と口調を真似て、呟つた。

「ばか。」

陽子は島田の頭を軽くはたく。

「こてえ～よ。」

島田は大袈裟に言つた。

島田は、ふう～と煙草の煙を深く吐き出すと、1本目の煙草を消した。

「俺は、ナナちゃん寝たかったよ。ナナちゃん、胸でけえ～し？」

やつぱ、一度お相手して欲しいじやん、男としては。

「・・・ばあか。」

奈々は、身体の向きを変えると腹ばいになつて、

島田と肩を並べるよつて、肘をついて上体だけおこした。

「吸うか？」

「うん、ちょーだい。」

島田は自分の口に煙草をくわえ、ライターで火をつけた。

そして、一度だけ、煙を吸い込み、ゆつくりと、吐き出すると、その煙草を奈々に渡した。奈々は、その煙草を受け取ると、煙を吸い込む。

島田は、裸の肩が触れ合つよつて、

奈々のほうに身体を寄せた。

そして、奈々の胸をのぞきこむ。

「やつぱ、でけえ～よな。」

「つねりこな、もつ。」

「村田が飲むと触りてえ～埋めてえ～って
言つてたもんな。」

「(J)の間の飲み会の2次会の時も
『触らせて』って、言われたよ。」
「で、どうしたん?」
「殴つといた。」

島田は2本目の煙草を消すと、
灰皿を差し出し、奈々にも消すように促す。
奈々は、自分の吸っていた
まだ長い煙草を灰皿に押し付けた。

「ねえ、ナナちゃん?」
「うん?」
「も、一回触らじて。」
奈々は、苦笑した。
「でさ、も一回、しようつよ。」
「若いね～。」
「まだまだ、だよ。」

島田は、その大きな掌で、
奈々の白い肩を抱き寄せた。

第1話「向で俺と寝たん?」（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ゆっくりペースの更新になるかもしれませんがあ
よろしくお願いいたします。

第2話「ねたし、下手だよ」

「これなり、『あたし、下手だから』だもんな。
やつぱり、奈々ちゃんつて、いへよ。」

島田は、また、ベッドに腹ばいになり、
枕に肘をついて上体をおこし、煙草に火をつけた。

「だつて、この年でこうのもなんだけど、
子どももいるのに、なんだけど、
やつぱり、下手なんぢゃないかと想ひつ。」

奈々は、ちゅうと投げやつて囁いた。

奈々が下手なのがどうかは、わからない。
正直、良いと思つ。

それが、妻ではない新鮮味からくるものか、
不倫というスリリング感からくるものか、
はたまた、友だちを抱くという背徳感からくるものか、
それとも、また、別の感情からくるものなのかな。
島田は、考えようとしていなかつた。

ただ、奈々があまりセックスに慣れていないところは、
奈々を抱いてみて、島田にはわかつた。

奈々には、学生時代から長くつきあつた彼氏がいたところ話
島田は、飲み会の席で、篠田から聞いていた。

「大学でちょっと有名だったんだぜ。」

篠田は言っていた。

奈々の進学した女子大と篠田の進学した大学は、「仲が良い」ので有名だった。

篠田の大学と奈々の女子大の合同サークルも多く、奈々もそんなサークルに所属していたらしい。

そのサークルで知り合った男とつきあつていたらしい。

「構内で、何度も見かけた。」

篠田は言った。

「だけど、声はかけなかつたけどな。」

篠田は苦笑した。

奈々は、中学時代、学校では、真面目なグループに属していた。篠田の進学した大学は、いわゆる難関であり、地方から進学するのは大変である。

遊んでいては通らない。

篠田は、中学時代も、その後も見た目は地味だった。

奈々の元カレは、大学でも有名な「遊んでる」グループだったといふ。

「何かオレ、声かけづらくてさ。

それに、山本さんも、雰囲気が変わっててさ。

本当に、同級生の山本さんか、自信なかつたし。」

「仲良さうに、歩いてたよ。」

相手の男は、女の子にもてていたが、
「遊ぶ」と言つても、田立つた女遊びはしていなかつたらしい。

「だから、山本さんが離婚したつて聞いてびっくりした。
そして、離婚した相手がアイツじゃなかつたのに、
もつとびっくりした。

当然、あの2人は結婚するだらうつて思つたから。」

きっと大学時代の彼氏は、

奈々の事を大事にしていたんだろうと島田は思つた。

島田の学生時代は、

「好きな子を大事にする。」と言つて、
恋人同士になつても、すぐに抱くことはしなかつた。

奈々の元カレもそういう奴だつたんだろ？と想つ。
それが、奈々の「経験のなさ」の
ひとつの中因なのではないかと思つ。

あれから、20年。

世間も自分たちも随分変わつたものだと思つ。

20年前の島田だつたら、奈々を抱いてはいないうだろ？

島田にとつて、奈々が何なのか、島田自身にもわからぬ。
だが、大事でないと言つたら、それはウソになる。

第3話「浮気がバレてさ」

「浮気がバレてさ、離婚することになった。」

奈々の隣に座つた佐々木が、ハイボールを口にしながら言った。

「なんだ・・・」
チラリと佐々木を見た。

真面目そうである。

浮気なんかしそうにないタイプだ。

「山本さんが離婚したのって、
ダンナさんの浮気が原因?」

「ううん。

違うけど、結婚してる間に浮気はしてたよ。」
奈々はカンパリソーダを一口のんだ。

奈々の声が聞こえたのか、
長いテーブルの奈々たちとは反対側のほうで、
島田がチラリと奈々のほうへ視線を走らせた。

この飲み会には10人あまりの友人が参加している。
仕事中に村田からメールがあり、

「今日、急に飲むことになったから、出てこい」と急に呼び出された。

どうも、離婚が決まつた佐々木を元気づける会らしい。

「メールのさ、受信は消してたんだけど、

送信履歴消すの忘れててさ、嫁さんにバレた。」

「ぱっか～」

「そう、馬鹿なんだよ。

だけどさ、身体は動いても、心は動いてなかつたんだけどさ。男なんてそんなものなのにな。」

「馬鹿だね～。」

「奈々ちゃん、俺の」と馬鹿つて叫びてくれよ。」

「馬鹿だね～。」

その時だった、いきなり、奈々は頭をつかまれると前後に振られた。

「どうした～？」

奈々がその状況にそぐわないのんびりした声を出して振り返るとそこには島田が立っていた。

「どうしたん？」

奈々がまたのんびりとした声できくと、「すまん、なんか、今日、仕事でイライラしてたから。山本で氣を晴らそうと思つて。」

「で、気が晴れた？」

「まあ、少し。」

島田はそれだけ言つと自分の席へ戻つて行つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3792n/>

大人の関係～それぞれの気持ち

2010年11月24日09時16分発行